

新書紹介

都市と地域の文脈を求めて

― 21世紀システムとしての都市社会学 ―

奥田道大著

有信堂高文社 二百三十六頁 三千八百十一円

いま、横浜市では二〇一〇年を目標にした新たな総合計画づくりに取り組んでいる。国でも、いかに国民生活を実質的に充実させるかが基本的なテーマとなる時代である。市民にとってより身近な問題の解決が要請される市の計画においても、行政施策を市民の生活という視点から見直すことが大きな課題となってくる。市民の生活を考えるとき、市民生活の諸課題の解決にあたって個人の生活の場であるコミュニティの担う役割は大きい。今後二十年近い時間を見通したとき、コミュニティがどのように変質していくのか、行政はコミュニティに対してどのように関わっていくべきなのか。今後のコミュニティ施策のあり方を検討する調査に携わりながら、こんなことを考えていたとき、目づいたのが本書である。

「都市と地域の文脈を求めて」と題された本書は一九八七年以降に発表された論文を集めたものである。ここに収められた論文のタイトルからキーワードらしきものを拾ってみると、都市社会学、地域、都市、コミュニティ、都心居住、住民、ニューカマーズとしての外国人、世界都市、二十一世紀システム、と多様な概念が並べられている。だが、本書を一読してみると、一見脈絡のない言葉をつなぐ、一本の太い糸が見えてくる。

横浜市のような都市自治体にとっては都市そのものがその存立の基盤である。都市社会学にとってもそれは同様である。都市化、郊外化と都心の衰退という都市の成熟と衰退の過程をなぞるように、都市社会学においても「都市化」、「町内会」、「郊外的コミュニティ」といっ

たテーマが研究対象とされてきた。しかし八〇年代以降、都市の現実自体が複雑化する中で、都市社会学についても自らの存立基盤を再構築しようとする動きが見られる。本書で取り上げられている幾つかのテーマも、こうした動きの一つといえよう。そして、ここに集められたいくつかの論文の底に流れているのは、「都市」と「地域」または「コミュニティ」を常に関係づけて、著者の言葉を借りれば「都市と地域の共通の文脈を求めること、都市と地域を相互に入り組み浸透しあう共同関係においてとらえ」ようとする強い志向である。上にあげたような様々なキーワードも、一貫してこうした文脈の中で語られている。

例えば世界都市東京論においていえば、国内及び国際レベルの中枢管理機能論を中心とした、コミュニティ抜きの大都市論に対して、そこにおけるコミュニティの存在にこだわり続けている。アメリカにおける大都市再活性化の動きを取り上げる場合にも、再開発地域におけるコミュニティの保持を中心的なテーマに据え、これを通して大都市の再定義、再組織化に迫ろうとしている。ニューカマーズとしての外国人など、東京インナーシティにおける新しい動きへの目くばりについても、ニューカマーズの実態をさぐるだけでなく、こうした人々の暮らしが、どのような影響を与えるか、その方向性についての示唆もなされている。端的に言えば著者の関心は、都市コミュニティの将来イメージそのものになるのではないだろうか。

それでは、新しいコミュニティのイメージとはどんなものが考えられるだろう。第一章「都市と地域の文脈を求めて」の中で、筆者は「都市化にともなう人々の生活スタイル、価値観の変化の中で、人的結合の紐帯が相互に入り組み、従来の枠組みをはみ出した」社会的ネットワークとしてのコミュニティに言及している。さらにこうしたコミュニティを前提に地域施設についても「日常と非日常のとの境界をなす中間施設として、多様な背景をもつ人々との出会いと出来事が保証」される場としての施設も提唱されている。

こうした議論はアメリカの八〇年代以降の現実をベースにしたものであるが、筆者も触れているように、コミュニティ分析の枠組みとして、従来の中心的地縁団体である「町内会」の役割が変化している中で、横浜市民の生活実態にもかなり前からこのような傾向が見えはじめていたのではないだろうか。平成四年に企画調整室が行った「よこはま三万人アンケート」でも、地域との付き合い方について回答者の七一・四%が「趣味が同じ人や気の合う人との付き合い」をあげ、「町内会・自治会や子供会などの地域の組織をつうじての付き合い」二五・一%を大きく引き離している。ここで提示されている新しいコミュニティの枠組みも、こうした現実を読み解く手掛かりとして十分に活用できるものではないだろうか。

〈企画財政局 古畑正孝〉